

(添付資料1)

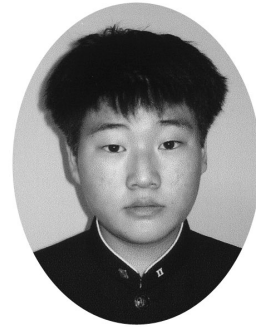
最優秀賞

文部科学大臣奨励賞

聞こえていると信じて

青森県福地村立杉沢中学校

二年 長 倉 浩 也



「おじいちゃん、僕だよ、ヒロだよ。」

僕の声が祖父の耳に届いているかどうかは判らない。ベッドに横たわる祖父は、相変わらず無表情だ。でも祖母はいつもの笑顔で、

「おじいちゃん、ほら、孫が来たよ。」

と、わざと大きな声を出し、祖父の肩をトントンとたたく。

僕はよく、母の両親である祖父母の家に行く。そして、真っ先に祖父の部屋に行き、声をかける。目を開いているときもあれば、閉じているときもあるが、必ず、「おじいちゃん、ヒロだよ。」と呼ぶ。

実は、僕は一度も祖父の声を聞いたことがない。祖父は僕が生まれる前に、大病をして、声を失っていたからだ。それでも、声が出ない事以外は元気だった祖父は、車の運転もできたし、身振り手振りで言いたいことを伝えることもできた。まだ小さかった僕を、よく動物園や水族館に連れて行ってくれる、優しくて楽しい祖父だった。

ところが、僕が五歳のとき、その祖父が突然倒れた。意識がなく、死ぬかもしれないとの連絡を受けた母は、僕を連れて大慌てで病院へ駆けつけたそうだ。意識のない祖父を見ても、何が起きたのかわからない僕に、母は、

「おじいちゃんは、頭の中で脳の回線がショートしちゃったんだよ。」

と説明してくれた。

幸い一命は取り留めたが、祖父は体にマヒが残っただけでなく、脳の回線もショートしたままだった。自分は誰なのか、今日は何月何日なのか、何を聞かれても祖父は全く無反応だった。やがて日がたつにつれ、手足が少しずつ動きを見せ始め、目をキョロキョロ動かすようになってきた。寝ているときと起きているときの区別もつくようになってきた。でも、今までのおじいちゃんと違

う。若い僕はなんだか恐ろしいものを見るように、祖父を遠巻きに見ていた。

しばらく入院をしていた祖父だが、これ以上よくはならないという医師の診断に、気持ちの切り替えのはやい祖母は、「自宅で介護する。」と宣言したそう。それからのことは僕もだいたい覚えていたが、リクライニングベッドを起こして、流動食を食べさせたり、床ずれがおきないようにしょっちゅう体の向きを変えたりして、いつ見ても祖母は大変そうだった。床ずれができて消毒をしてあげていたとき、僕は「痛くないのかな。」と心配したが、祖母は、

「そりゃ痛いでしょ。でも生きている証拠よ。」

と、笑って治療をしていた。また、祖父は、声を失って以来、のどの下に呼吸をするための穴がぽっかり空いている。祖父はもう自力でタンを切ることができない。穴がタンで詰まると息ができなくなるため、祖母は、しょっちゅうその穴の掃除をしている。僕はそういうすを見ていると、正直言って、今でも怖い。でも祖母は、

「おじいちゃんが死んじゃったら困るもん。」

と平気で穴を触る。

祖母は、祖父が元気だったときと変わらず、いつも普通に話しかけている。僕には判らないが、祖父のちょっとした様子を感じ取り、

「今日は、おじいちゃん、機嫌悪いよ。」などと言いながら、ニコニコと大量の洗濯物を干している。二十四時間つきっきりで大変そうなので、「施設に預けたら？」と母や僕が言うと、

「おじいちゃんいないと、寂しいもん。」

と、やっぱりニコニコ笑っている。ああ、祖母は本当に祖父のことが大切なんだ、祖父が生きていて良かった、と僕はそのとき思った。

ある日、テレビで、とても興味深いニュースを見た。交通事故で二十年間寝たきりだった男性が、毎日の母親の声がけのおかげで、突然記憶が戻り、元気になった、というものだ。僕がその話を祖母にすると、

「おじいちゃんにはもう無理だよ。」

と笑っていたが、毎日毎日、反応のない祖父に話しかけている祖母を見ていると、希望を捨てていないことが、よくわかる。

でも祖父は年々確実に、衰えていつている。このごろはドロドロの食事も飲み込めなくなったし、自宅でお風呂に入れるのも不可能になった。けれど祖父は、きっと聞こえているはずだし、見えているはずだ、と僕たち家族は信じて

いる。僕のことだって忘れてはいるはずがない。あんなにかわいがってもらったのだから。

祖父は寝たきりだが、いつでも祖母の心の支えになっている。祖母は毎日祖父に話しかけている。たとえ一方通行でも。僕はそんな祖母を尊敬しているし、少しでも祖母の助けになってあげたいと思っている。僕も、祖母を見習って、祖父に大きな声で話しかける。

「おじいちゃん、ヒロだよ。」

と。聞こえていると信じて――。

「おじいちゃん、今日、気分がいいって。」

祖母が笑顔で僕にそう言った。